

## 5. まとめにかえて

以上、追跡調査の回答者にみられる高校卒業後の3年以内における就業状況と、そのなかで本人が感じている働く現実について、その自由記述の回答内容から考察してきた。

本文でも述べたように、ここでみた自由記述の回答は、ランダムに選ばれたものではなく、回答者の属性に一定の偏りがあることも予想される。また回答者本人が、その思いを的確に言葉として表現出来るかどうかも定かではない。ここでの記述のみにもとづいて、高卒直後の就業者の心的状況を単純に整理し、一般化するのには適当ではないだろう。

ただ、これらの回答に素直に耳を傾ける限り、その多くに働くことの意味、そして自分の人生や将来について、正社員とそれ以外で多少の違いこそあれ、共通して何からの「揺れ」を感じる事が出来るように思われる。自分の思いを回答する場合には、多かれ少なかれ、自分の思いを自分なりに取りまとめ、言葉に置き換える作業が必要になる。そのような思考作業を経た回答ですら、そこには多くの混沌を垣間見ることができる。その揺れとは、言い換えれば、ときに充実と仕事の難しさ、さらには働くことの喜びと苦しさ、共存しあっている状況とでも表現すれば良いのだろうか。若者に特有の仕事と遊びの両方を充実させたい思い等もある。おそらくは回答を躊躇した人のなかでは、より一層の混沌とした状況が心的にあるのだろう。

さらに揺れのなかには、同一時点で多様な思いが内在しているのみでなく、同一個人の中なかでも大きく、仕事や生活についての考え方や価値観が変動していることも含まれよう。かつては、仕事への慣れがむしろその後には不満になったり、楽しさを全面に感じていたのが辛くなったり、やりがいを感じていたのが途中から働くことへの疑問も芽生えたり、またそれらの正反対の状況も見られたりする。学卒前の心的状況も含めて、その揺れ幅があまりに大きいことが、仕事や働くことの意義への迷いだけでなく、自分の存在そのものへの迷いにすらつながっている記述も見られた。

おそらくは、3年間に揺れを感じたり、経験したりすること自体は、けっして否定的なことばかりではないだろう。むしろ、容易には解消されない不安のなかで、自らの方向を模索するプロセスこそ、きわめて重要なように思われる。特にその揺れのプロセスのなかで、その後のキャリア形成をより有意義なものにするためのヒントも、自由記述のなかにはいくつか発見された。

その一つは、やはり自らの成長実感の重要性である。苦労や失敗を経験するなかで、それを乗り越えた経験を積むなかで、自らの潜在的な可能性に気づいたり、その能力に伸びしろがあることを実感したりした体験は、揺れのなかで働き抜く強い原動力になっている。

そのような成長実感をもたらすためにさらに重要な感覚とは、仕事を教えてもらっているという実感である。自らの成長を感じるためには、多くの場合、他者の関与が重要であり、上司や仲間、ときには取引関係、顧客からの信頼や期待に基づく指導や訓練、助言を得ることが支えとなる<sup>9)</sup>。成長実感や仕事を教えてもらっている実感は、教育訓練が与えられることの多い正社員が、より得やすい現実もある。しかし、さらに大切なのは、正社員／非正社員の枠組みを超えて、成長実感や広い意味での教育機会を広く充実させることこそ、高校卒業後の多様な就業形態が現実となっている環境において大切となっていることであろう。そのことを、自由記述の言葉一つひとつが、私たちに訴えかけているのではないだろうか。

## 【注】

- (1) 1994年3月の高校卒業生では就職率27.7%であったが、追跡調査を実施している2004年3月卒業生では就職率は16.9%まで低下している。
- (2) たとえば、太田(2003)に収録されている図7-3(学歴別・新規学卒者の在職3年以内の離職率)をみても、1987年以降98年までの期間、一時的な減少はあっても、増加傾向はみられないことがわかる。
- (3) この点については、すでに1970年代から実証研究が蓄積されている。雇用職業総合研究所(現労働政策研究・研修機構)では中学卒業からの10年間を追跡する調査研究を1970年に開始した。この研究から、学校卒業後の初職が、若年期のキャリア、とくに離職職に対して大きな影響を与えることが明らかにされている(雇用職業総合研究所編、1988)。
- (4) われわれと同じデータをもちいている元治(2006)によれば、高卒後1年で「自分の進路について今も悩んでいる」とする比率は、高校卒業時と比較して20%も増加しており、これは就職者でも在学者でも共通である。
- (5) 原・佐野・佐藤(2006)は、人材育成に積極的な企業ほど高卒採用を継続的にこなっていることを明らかにしている。ここからは、企業の教育訓練が著しく不足した場合、高卒就職者は技能形成がおこなわれず、また職場にも適応しにくいことから、早期に離職しやすくなり、結果的に企業が継続的な高卒採用を控えることになることが示唆される。
- (6) 2.1でもふれたが、日本労働研究機構(当時)では1998年3月の高卒者を対象とした追跡調査をおこなっている。吉本(1992)によれば、正社員が占める比率は、高卒後1年目91.1%、3年目89.5%となっている。3年目までに非正社員を経験している比率は13.3%であるが、そのうちの3分の2が現職では正社員となっている。われわれのサンプルが、かなり限定されたものであることは事実が、両者の違いは時代によるところが大きいと考えられる。
- (7) 前掲吉本(1992)は、高卒後3年目までの正規就業継続者が、離職や中途就職の経験者と比較して、「仕事はおもしろい」と回答する比率が最も低い一方で、「仕事は同じことの繰り返しである」と回答する比率が最も高いことを明らかにしている。1990年頃の新規高卒就職者のために用意された職種は、単調な繰り返し仕事が多かったようであるが、この事情は、おそらく近年でも変化していない、あるいは強化されていると考えられる。
- (8) 安田(2003)は「現実社会における他者とのかかわりのなかで、自らの適性を自覚し、仕事の内容や職場に雰囲気を確認し、関係のなかから仕事と自分とに定義を与えていく」「他者との関係こそが、人を職業に結びつけ、自分がいかなる資質や技能をもち、自分が誰であるかを定義する」としている。
- (9) 注(8)参照。

## 【参考文献】

- 乾彰夫(2006a)『『フリーター・ニート』概念の問題性』乾彰夫編著『不安定期を生きる若者たち—日英比較 フリーター・ニート・失業』大月書店
- 乾彰夫編著(2006b)『18歳の今を生きぬく 高卒1年目の選択』青木書店
- 太田聡一(2003)「若者の就業機会の減少と学力低下問題」伊藤隆敏・西村和雄編『教育改革の経済学』日本経済新聞社
- 元治恵子(2006)「進路意識の変化とその規定要因」『若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関

- 連に関する実証研究—平成 17 年度 総括研究報告書』(主任研究者 佐藤博樹)
- 玄田有史 (1997) 「チャンスは一度」『日本労働研究雑誌』第 449 号、2-12 頁
- 玄田有史 (2005) 『働く過剰』NTT 出版
- 玄田有史編 (2006) 『希望学』中公新書ラクレ、中央公論新社
- 玄田有史・佐藤香 (2006) 「将来の人生設計に関する高校生の意識—そのアンビヴァレントな現実」  
『若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究—平成 16 年度 総括研究報告書』(主任研究者 佐藤博樹)
- 玄田有史・堀田聡子 (2007) 『働き方と学び方に関する調査報告』近刊
- 小杉礼子 (1990) 「職業キャリアと労働をめぐる若者の価値観」『高卒者の進路選択と職業志向 初期職業経歴に関する追跡調査より』(調査研究報告書 No. 4) 日本労働研究機構
- 小杉礼子 (編) (2002) 『自由の代償/フリーター』日本労働研究機構
- 小杉礼子 (編) (2005) 『フリーターとニート』勁草書房
- 雇用職業研究所 (編) (1988) 『青年期の職業経歴と職業意識——若年労働者の職業適応に関する追跡研究総合報告書』
- 佐藤香 (2003) 「JGSS-2002 にみる働きかたの多様化・雇用条件・職業観」『日本版 General Social Survey 研究論文集 [3] JGSS で見た日本人の意識と行動』東京大学社会科学研究所
- 佐藤香 (2007) 「働きかたの多様化と社会的格差」谷岡一郎・仁田道夫・岩井紀子編『日本人の意識と行動』東京大学出版会 (近刊)
- 佐藤博樹 (2002) 「非典型労働に従事する人々」岩井紀子・佐藤博樹編『日本人の姿 JGSS にみる意識と行動』有斐閣
- 原ひろみ・佐野嘉秀・佐藤博樹 (2006) 「新規高卒者の継続採用と人材育成方針——企業が新規高卒者を採用し続ける条件は何か」『日本労働研究雑誌』第 556 号、63-79 頁
- 安田雪 (2003) 『働きたいのに…高校生就職難の社会構造』勁草書房
- 吉本圭一 (1992) 「初期キャリアのパターンと職業生活」『高卒 3 年目のキャリアと意識 初期職業経歴に関する追跡調査 (第 2 回) より』(調査研究報告書 No. 28) 日本労働研究機構

# 母親の子育て方針と高校生の自信

本田由紀

(東京大学社会科学研究所)

本稿の目的は、高校生の「自信」を取り巻く諸要因の連関構造、中でも母親の子育てのあり方との関係を明らかにすることにある。そのために、高校生と母親のマッチングデータを使用し、高校生調査からは「自信」に加えて「家族コミュニケーション」、「対人能力」、「校内学業成績」、母親調査からは子育て方針として「内面志向」「外面志向」「達成志向」および家庭全体の所得と母学歴（教育年数）の各変数を分析に導入した。性別および学校タイプ別・性別に相関係数による分析を行った結果、高校生の「自信」は学業成績よりも家族コミュニケーションや対人能力と強く関連していること、母親の子育てのあり方はいかなる内容に重点を置いていても高校生の「自信」に対して間接的に負の影響を及ぼしがちであること、家庭の所得が高校生の「自信」と直接・間接に関連していることが見出された。

## 1. 問題関心

家庭教育の重要性が政策的にもマスコミ上でも喧伝されている。2006年12月に強行採決された「改正」教育基本法においては、旧法にはなかった家庭教育に関する条項が新設された。文部科学省のホームページ上でも、「家庭の教育力の向上」、「[子どもと話そう]全国キャンペーン」、「早寝早起き朝ごはん運動」などが大々的に掲げられている。また、雑誌や一般向け書籍などにおいても、家庭内で親が子供に対していかにふるまうべきかについてのハウツーが大量に語られている。これらの動きは、家庭における親の子供への対し方が、子供に「基礎学力」のみならずいわゆる「人間力」的な能力を形成する上で重要だという前提に立っている。

「人間力」は曖昧な概念であるが、総じて、前向きで柔軟な「強い個人」がイメージされている場合が多いと言ってよいだろう。そうした「強さ」の基盤として、困難にぶつかっても乗り越えていけるというような、自分への信頼＝「自信」の存在が想定されていると考えられる<sup>(1)</sup>。

それでは、家庭における親の子供への対し方は、実際に子供や若者における「自信」の形成にいかなる影響を及ぼしているのだろうか。

本稿では、高校生とその母親のマッチングデータを用いて、母親の子育て方針と高校生の「自信」との関係について検討することを目的とする。

## 2. データと変数

分析に使用するデータは、高校3年生調査サンプルの中で保護者調査において母親が回答しておりマッチングが可能であった368名のデータである。以下では性別・高校タイプ別に分析を行うため、それぞれに該当するサンプル数を表1に示す。

表1 分析に使用するサンプル数 (人)

	普通科上位校	普通科下位校・総合学科	専門学科	合計
男子	81	45	23	149
女子	123	70	26	219
合計	204	115	49	368

保護者調査の中で母親が回答している場合のみに分析サンプルを限定したのは、父親が長時間労働に従事していることの多い日本では母親が家庭教育の主な担い手である場合が大半であると考えられることと、母子関係と父子関係では性質が異なると考えられるため分析が複雑になることを避けるために今回は前者にのみ焦点を当てたことを理由とする。

分析に当たって、高校生調査、保護者調査のそれぞれに含まれる質問項目から、以下の合成変数を作成した。

◆高校生調査

\*自信：「私には人並みの能力がある」「全体として、自分に満足している」「自分には何のとりえもないと感じる」「決めたことは最後までやりとげる自信がある」のそれぞれについて4段階（とてもあてはまる／ややあてはまる／あまりあてはまらない／まったくあてはまらない）でたずねた結果に4～1点のスコアを与えたもの（「自分にはなんのとりえもないと感じる」については逆順）の平均値。クロンバッハの  $\alpha = .6115$ 。

\*家族コミュニケーション：家族と「学校での出来事」「授業の内容」「成績」「高卒後の進学」「高卒後の就職」「世の中の出来事」「悩み事」「あなたの将来」のそれぞれについてどれほどひんぱんに話し合うかを3段階（ひんぱんに／時々／まったくない）でたずねた結果に3～1点のスコアを与えたものの合計。クロンバッハの  $\alpha = .7455$ 。

\*対人能力：「友だちから悩み事を打ち明けられることが多い」「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」「友だちが間違っただけをしたら指摘すべきだと思う」「自分には人を引っばっていく力がある」「嫌いな人、苦手な人とも、うまく付き合う努力をしている」のそれぞれについて4段階（とてもあてはまる／ややあてはまる／あまりあてはまらない／まったくあてはまらない）でたずねた結果に4～1点のスコアを与えたものの平均値。クロンバッハの  $\alpha = .6781$ 。

以上の中で、自信は「人間力」の基底として本稿が注目する従属変数である。家族コミュニケーションと対人能力は、別の分析において高校生の意識に対する影響力が大きいことが確認されている変数である<sup>(2)</sup>。

◆保護者調査

\*子育て内面志向：子供を育てるにあたって「誠実であること」「良識のある判断ができること」「自制心があること」「まわりの人と協調できること」「責任感があること」「思いやりがあること

と」のそれぞれについて5段階（とても重要／やや重要／どちらともいえない／あまり重要ではない／重要ではない）でたずねた結果に5～1点のスコアを与えたものの平均値。クロンバッハの $\alpha=.8178$ 。

\*子育て外面志向：子供を育てるにあたって「親の言うことをよく聞くこと」「まじめであること」「礼儀正しいこと」「身だしなみがよいこと」「男らしく、または女らしくふるまうこと」のそれぞれについて5段階（とても重要／やや重要／どちらともいえない／あまり重要ではない／重要ではない）でたずねた結果に5～1点のスコアを与えたものの平均値。クロンバッハの $\alpha=.7410$ 。

\*子育て達成志向：子供を育てるにあたって「成功しようと努力すること」「探求心が強いこと」「信念を貫くこと」「仲間にながされないこと」のそれぞれについて5段階（とても重要／やや重要／どちらともいえない／あまり重要ではない／重要ではない）でたずねた結果に5～1点のスコアを与えたものの平均値。クロンバッハの $\alpha=.6499$ 。

これら子育てに関する3つの志向は、上記の合計15個の項目を投入した主成分分析を行った結果に基づいている<sup>(3)</sup>。子育て内面志向とは、子供が誠実さや良識、自制心、責任感、思いやりなど、良い心（＝内面）を身につけることを重視する子育てのあり方である。子育て外面志向とは、身だしなみや礼儀、ジェンダー規範に則ったふるまい、親への従順さなど、外に現れる行動（＝外面）を整えることを重視する子育てのあり方である。そして子育て達成志向とは、成功や探求、信念の一貫性など、特定の方向に向かって突き進むこと（＝達成）を重視する子育てのあり方である。

またこれら以外に、高校生調査からは校内学業成績（上のほう～下のほうまで5段階でたずねた結果に5～1点のスコアを与えたもの）、保護者調査からは母学歴（最終学歴を教育年数に換算したもの）および家庭全体の所得（15段階でたずねた結果における各階級の中央値）を分析に使用する。

表1に示したように、使用するデータのサンプル数が少ないため、以下の分析では多変量解析ではなく相関係数によって変数間の連関を明らかにしてゆく。

### 3. 分析結果

#### 3.1 高校生の自信の構造

子育て方針など母親側の変数との関連を見る前に、まず、高校生調査に含まれる、自信、家族コミュニケーション、対人能力、学業成績という4つの変数について検討を加えておく。

表2には、性別・高校タイプ別に、自信、家族コミュニケーション、対人能力のスコア平均値と標準偏差を示した。男女間でも、また男女それぞれの内部における高校タイプ間でも、各変数のスコアに有意差は見出されなかった。

続いて図1には、男女別にこれら4変数間の相関係数をとった結果、有意な相関が見出された関係を示している。男子では家族コミュニケーション－対人能力－自信という連関構造があり、校内学業成績は弱い相関があるにすぎない。男子の中では自信の基盤として学業成績は重要ではなく、対人能力の重要性が高いといえる<sup>(4)</sup>。他方の女子では上記の連関構造に加えて家族コミュニケーション－校内学業成績－自信の間にも三角形の連関があり、学業成績が自信の背景として男子よりも重要になっている。

表2 性別・高校タイプ別 高校生調査変数のスコア平均値と標準偏差

		家族コミュニケーション		対人能力		自信	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
男子	全体	16.25	3.34	2.63	0.57	2.64	0.55
	普通科上位校	16.28	3.18	2.62	0.63	2.61	0.56
	普通科下位校・総合学科	15.84	3.51	2.60	0.49	2.66	0.56
	専門学科	16.95	3.58	2.70	0.47	2.68	0.50
	分散分析	N.S.		N.S.		N.S.	
女子	全体	16.54	2.89	2.82	0.50	2.63	0.58
	普通科上位校	16.62	2.84	2.81	0.48	2.65	0.56
	普通科下位校・総合学科	16.63	2.82	2.88	0.52	2.61	0.60
	専門学科	15.96	3.36	2.71	0.50	2.55	0.59
	分散分析	N.S.		N.S.		N.S.	

また図2には、性別・高校タイプ別に同様の分析を行った結果を示した。男子の中で、普通科上位校についてみると、男子全体では見出された家族コミュニケーション-対人能力の連関は弱くなり、むしろ家族コミュニケーションが直接に自信と連関している。対人能力-自信の連関はやはり見られる。普通科上位校すなわち進学校の男子においては、自身の対人能力に加えて家族関係に支えられる形で自信が形成されていることがうかがえる。

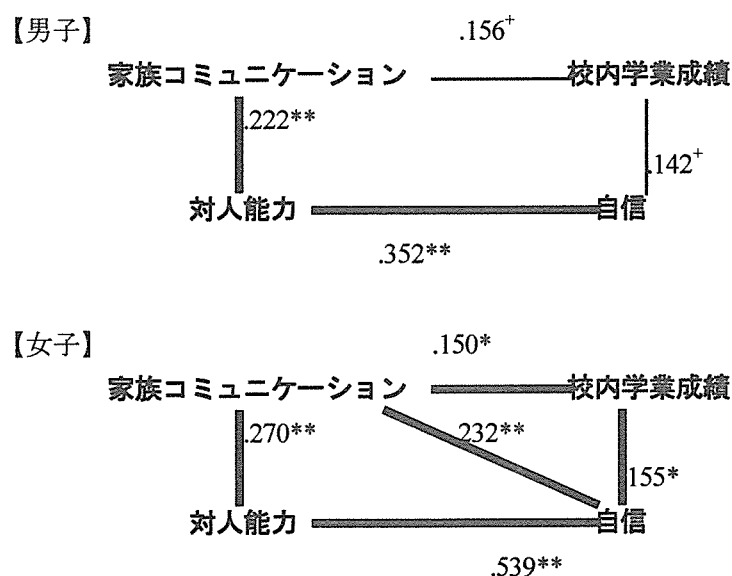
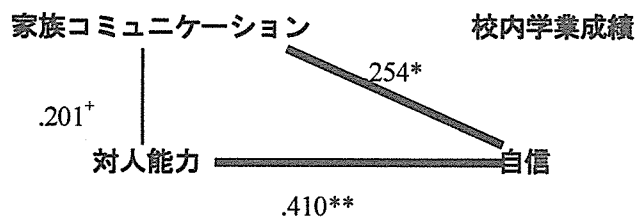
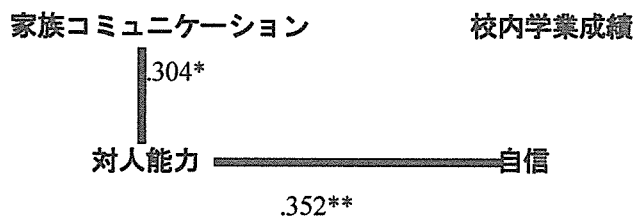


図1 性別 高校生側4変数の相関係数

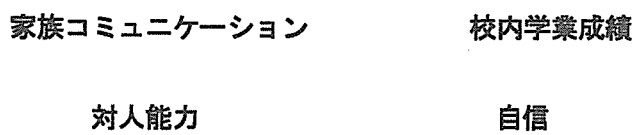
【男子・普通科上位校】



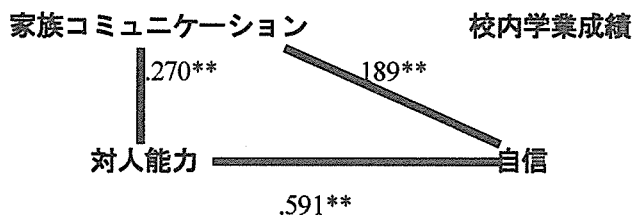
【男子・普通科下位校・総合学科】



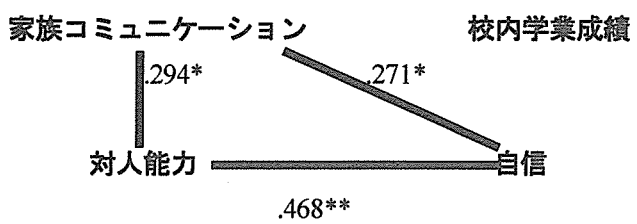
【男子・専門学科】



【女子・普通科上位校】



【女子・普通科下位校・総合学科】



【女子・専門学科】

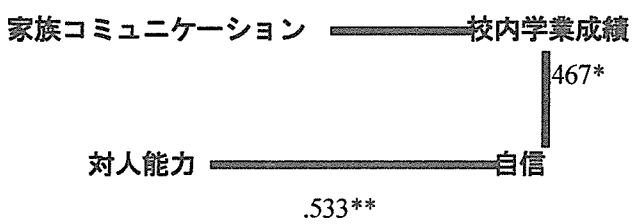


図2 性別・高校タイプ別 高校生側4変数の相関係数



普通科下位校・総合学科の男子は男子全体と同様の結果を示している。

興味深いのは、専門学科に在学している男子においてはこれら4変数間に有意な相関が見られないことである。これはこのグループのサンプル数が少ないことにも起因していると思われるが、後述するようにほぼ同じサンプル数の専門学科女子では変数間の連関が存在することを考慮すると、やはり専門学科男子では自信の背景として家族や対人能力、学業成績が重要な意味を持っていないことが表れているといえよう。ただし、表2で見たように、専門学科に在学する男子は他の高校タイプの男子と比べて自信の水準そのものが低いわけではない。ここから、専門学科男子の自信は、これら3変数とは異なる要因—たとえばアルバイト先での友人関係など<sup>(5)</sup>—に基盤をもっていると考えられる。

女子については、普通科上位校と普通科下位校・総合学科では家族コミュニケーション—対人能力—自信の間に三角形の連関構造があり、女子全体では見出された学業成績の関連性が消えている。普通科や総合学科の女子にとって成績は自信の重要な背景となっていないといえる。

それに対して専門学科の女子においては、家族コミュニケーション—学業成績—自信という流れと、対人能力—自信という流れが成立している。専門学科女子では、対人能力だけでなく、家族に励まされる形で学業成績を上げることが自信を支える重要な要素となっている。

### 3.2 家族コミュニケーションに関する母親側の要因

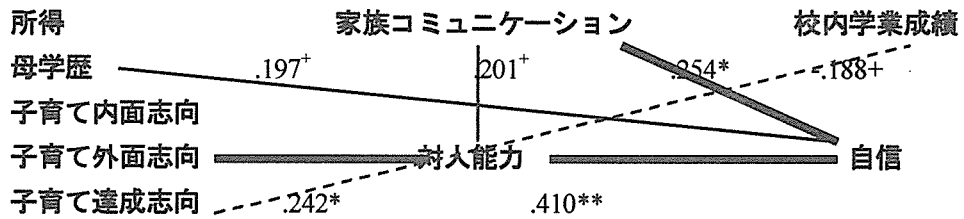
本項では、前項における分析に対して、保護者調査から把握される母親側変数を追加する形の分析を行う。

表3 性別・高校タイプ別 保護者調査変数のスコア平均値と標準偏差

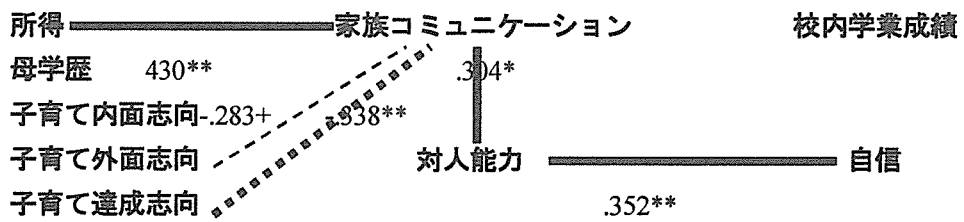
		所得		母学歴(教育年数)		しつけ内面志向		しつけ外面志向		しつけ達成志向	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
男子	全体	740.49	412.31	13.38	1.67	3.62	0.38	2.91	0.54	3.22	0.48
	普通科上位校	826.67	445.57	13.86	1.67	3.59	0.39	2.80	0.50	3.18	0.46
	普通科下位校・ 総合学科	650.00	363.61	13.02	1.62	3.66	0.38	3.04	0.58	3.31	0.53
	専門学科	632.61	330.84	12.41	1.18	3.67	0.35	3.06	0.52	3.17	0.42
	分散分析	*		***		N.S.		*		N.S.	
女子	全体	767.78	419.73	13.24	1.59	3.63	0.39	2.98	0.54	3.19	0.53
	普通科上位校	850.00	432.82	13.47	1.46	3.66	0.36	2.95	0.53	3.19	0.53
	普通科下位校・ 総合学科	646.03	370.63	12.97	1.82	3.61	0.41	3.07	0.59	3.19	0.57
	専門学科	726.00	414.36	12.88	1.40	3.53	0.41	2.88	0.48	3.23	0.41
	分散分析	**		+		N.S.		N.S.		N.S.	



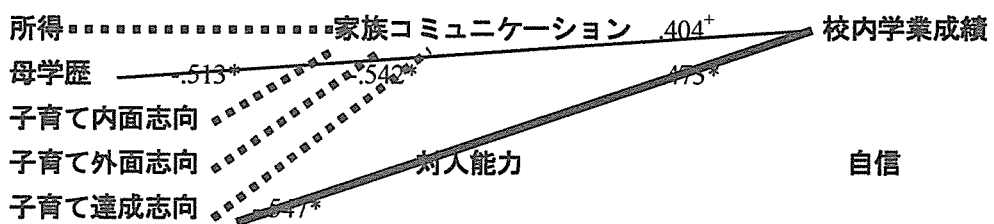
【男子・普通科上位校】



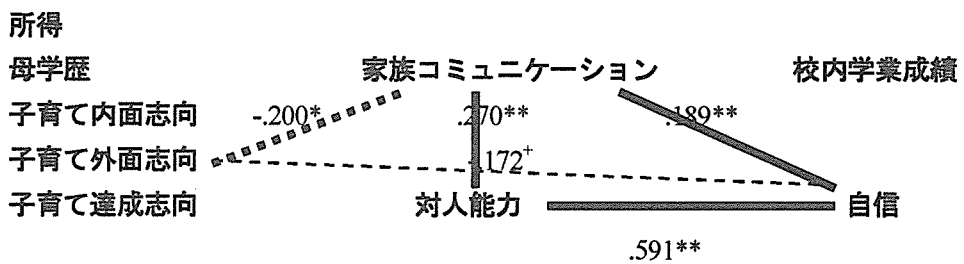
【男子・普通科下位校・総合学科】



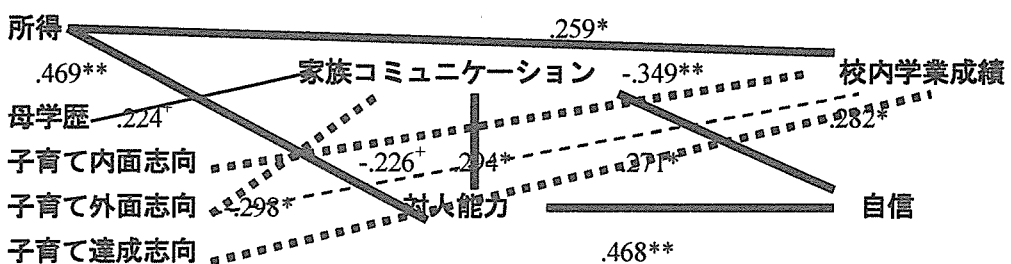
【男子・専門学科】



【女子・普通科上位校】



【女子・普通科下位校・総合学科】



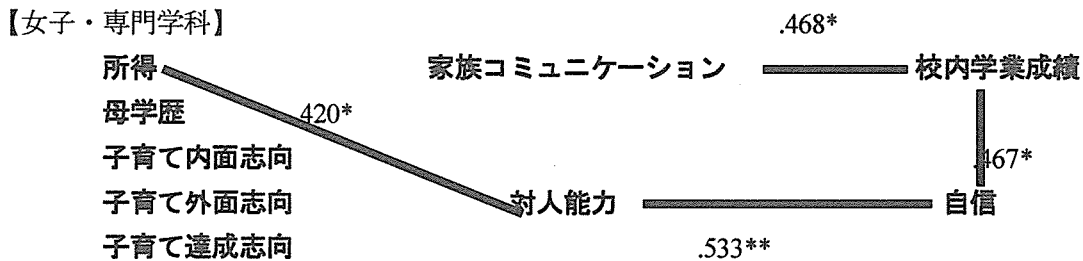


図4 性別・高校タイプ別 高校生側および母親側変数間の相関係数

他方で、専門学科の男子では、家庭全体の所得と、3つの子育て方針のいずれもが、家族コミュニケーションと負の相関をもっている。いかなる内容であれ、母親が子供の教育に熱心であればあるほど、専門学科男子は家族とのコミュニケーションが疎になるという逆効果が見出される。一方、母親が達成志向の子育て方針を持っている場合、子供の学業成績は高くなっている。母学歴と学業成績の間にも弱い正の関連がある。ただし先述の通り、学業成績は自信とは結びついていない。

女子については、普通科上位校では外面志向の子育て方針が家族コミュニケーションと負の、自信とも弱い負の、それぞれ関連をもっており、「きちんとしていること」を重視する母親のあり方が、先に見た同じ普通科上位校の男子とは逆方向に働いている。

普通科下位校・総合学科の女子では、複雑な連関構造が見出される。家庭の所得が学業成績及び対人能力と正の、母学歴が家族コミュニケーションと弱い正の、それぞれ連関を持つ一方で、内面志向および達成志向の子育て方針は学業成績と、外面志向の子育て方針は家族コミュニケーションおよび学業成績と、それぞれ負の連関を持っている。非進学校に在学する女子にとって、母親が様々な仕方で子育てに熱心であることは、学業や家族関係をむしろ阻害しがちになっている。

専門学科の女子は、母親の子育て方針による影響が小さいという点では普通科下位校・総合学科の女子と異なるが、家庭の豊かさと対人能力の間に関連があるという点では共通している。いかなる学科であれ、非進学校の女子にとって、家庭の経済階層の高さが本人の対人能力経由で自信に影響している。

最後に付言すべきは、性別や学校タイプを問わず、母親側の諸変数は子供の「自信」に直接の影響をあまり及ぼしていないということである。特に子育て方針は、他の変数を経由した間接的な影響はあるが、それらは普通科上位校男子の場合を除いて多くはネガティブな影響である。家庭背景の影響は、特に非進学校において、所得という即物的な回路で子供に影響している面の方が大きいといえる。

なお、図3および図4の分析において、母学歴と高校生側諸変数との間には強い連関がほとんど見出されなかった。様々な既存研究においては、母親の学歴が子供の教育達成や地位達成をめぐる意識（教育アスピレーションや職業アスピレーションなど）や行動（勉強時間など）に影響していることが指摘されているが、本稿で取り上げた「自信」や「対人能力」など教育達成や地位達成と直接に結びついてはいない諸変数については、そうした影響関係が見出されなかった。ただしこれはサンプル数や分析手法に起因する面があるかもしれない。

#### 4. まとめ

以上の分析から見出されたことを、改めてまとめよう。

第一に、多くの高校生の間では、学業成績は自信の背景として重要ではなくなっている。学業成績が自信と明確に関連しているのは専門高校女子においてのみである。

第二に、多くの高校生にとって、家族関係や対人能力が自信の源となっている。家族とのコミュニケーションの良好さは、直接に、あるいは学業成績や対人能力を経由する形で間接的に、高校生の自信を支えているといえる。これは逆に言えば、家族との関係が良好でなかったり対人能力に自信がなかったりすることが、高校生の自信を阻害しがちであることを意味している。ただし、専門学科の男子にとっては家族との関係性は自信と密接に関連しておらず、彼らの自信は家族や学校（成績）以外の要素から獲得されている。

第三に、母親の子育て志向は、いかなる内容のものであれ、しばしば子供にとって負の効果をもたらしている。それは自信を直接に左右してはいないが、進学校以外の男子や普通科の女子においては家族コミュニケーションを妨げるように働きがちであり、それを媒介として自信に間接的に影響している。特に、男子の場合は達成志向の子育て方針が、女子の場合は外面志向の子育て方針が、そうしたマイナスの影響を強くもっている。これらの面で母親が子供に熱心に働きかけることは、子供にとっては口うるさい干渉とも感じられ、むしろ家族（母親）に対して心を閉ざすようになる危険があるということについて、社会の認識を高める必要があるのではないだろうか。

ただし、進学校の男子では、母親が礼儀や身だしなみなど外面的なことを重視した子育て方針をとっていることが、対人能力を経由して自信に正の効果を及ぼしている。進学校は他の学校タイプと比べて家庭の所得や母学歴が高く、総じて出身の社会階層が高い生徒が集まりがちである。そうした特定の社会集団内部では、母親による特定の子育て方針が功を奏する場合もあるといえる。

第四に、進学校以外の高校生の間では、家庭の所得からの影響が様々に見出される。男子の場合は所得が家族コミュニケーションと関連しているが、それは普通科下位校・総合学科では正、専門学科では負という逆方向をとっている。女子の場合は所得と対人能力の間に関連がみられ、普通科下位校・総合学科女子では学業成績とも関係している。親の子育て方針とは別に、家庭の所得という即物的な要素が、高校生の生活を左右していることがわかる。換言すれば、家庭の所得格差が家族関係や高校生自身のあり方における格差と密接につながっているといえる。

以上の知見は、限られたサンプルを対象として、しかもごく単純な分析から得られた結果にすぎないため、過度に一般化して考えることには慎重でなければならないことは言うまでもない。しかし今、これらの知見を本稿の冒頭で述べた問題関心に即して敷衍してみるならば、家庭教育に（母）親が力を入れることは、一部の高階層集団の場合を除いて、「人間力」（の重要な要素であるところの自信）の形成を促進する方向に働くとはいえないということになる。むしろ、家庭の経済基盤が安定しているかどうか、家族関係などを經由して高校生の「人間力」に影響しがちであるということ、本稿の分析結果は示唆している。それゆえ、仮に子供や若者に「人間力」を身につけさせようとするのであれば、何よりもまず、すべての家庭が安定した家計状態のもとで落ち着いて家族関係を維持できるようにするという施策が不可欠なのでは

ないだろうか。

[注]

(1) 荻谷剛彦(「自信」の構造)『階層化日本と教育危機』有信堂、2001年)は、高校生の「自信」の構造に関する分析の結果、低階層家庭出身の高校生において業績主義的価値観からの離脱がむしろ「自信」すなわち「自分自身にいい感じをもつこと」を高めていることに対して問題視する見方をとっている。しかし本稿ではそうした見方をとらず、仮に業績主義的価値観と反するものであっても、高校生が「自信」を持ち得ているならばとりあえずそれを是認ないしニュートラルに見るスタンスをとる。

(2) 本田由紀「高校生の『対人能力』『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版、2005年。

(3) 主成分分析の結果は下表を参照。

	第1主成分	第2主成分	第3主成分
成功しようと努力すること	0.210	-0.006	0.587
誠実であること	0.646	0.175	0.174
良識のある判断ができること	0.761	0.036	0.178
自制心があること	0.729	0.184	0.217
まわりの人と協調できること	0.670	0.322	0.011
親の言うことをよく聞くこと	0.114	0.600	0.077
責任感があること	0.572	0.260	0.436
思いやりがあること	0.671	0.110	0.200
探求心が強いこと	0.231	0.197	0.670
まじめであること	0.217	0.490	0.398
信念を貫くこと	0.023	0.264	0.779
仲間にながされないこと	0.199	0.173	0.543
礼儀正しいこと	0.299	0.647	0.259
身だしなみがよいこと	0.171	0.720	0.249
男らしく、または女らしくふるまうこと	0.103	0.780	0.064
固有値(ハリマックス回転後)	3.080	2.533	2.332
説明された分散の%(ハリマックス回転後)	20.553	16.884	15.550

(4) ただし、高校生調査の対象者全体を対象とし、より大きなサンプル数を確保した上で、「自信」の規定要因について性別・高校タイプ別に重回帰分析により検討した結果(内藤朝雄・本田由紀『若者たちの現在』をめぐって)内藤朝雄『いじめと現代社会』双風舎、2007年)では、校内学業成績と「自信」の間には関連が現れている。それゆえ今回の分析結果は対象グループ別のサンプル数の少なさが関連している可能性がある。

(5) 上記注(4)文献参照。

(6) 以下の図3・図4では、保護者調査に含まれる5変数相互の連関は、図が複雑になりすぎるため表示していない。

# 高校生の描く将来像

## ——30歳時のキャリアデザイン・ライフデザイン——

元治恵子

(立教大学・武蔵大学)

本稿は、若年層のキャリアデザイン・ライフデザインの実態を明らかにすることを目的とする。30歳時点での希望の働き方（「働かない」も含めて）と属性や意識との関連を検討していく。分析に用いるデータは、2004年1月に実施された調査のものであり、若年層をめぐる雇用環境は、回復していない状況にあった。このような状況のなかで、若者はどのような将来像を描いているのだろうか。キャリアデザイン・ライフデザインは、男女ともに〔正社員〕を希望する者が多いものの、女子で〔専業主婦〕や〔パート・アルバイト〕を希望する者も多く、違いが見られた。これは、現在の働くことをめぐる男女の状況を反映したものと考えられる。また、キャリアデザイン・ライフデザインに対し、男子では、成績自己評価、予定進路、進路に関する意識、フリーターに関する意識、女子では、学校ランク、予定進路、進路に関する意識、フリーターに関する意識、親との同居に関する意識が、有意な効果をもっていた。

### 1. はじめに

#### 1.1 問題の所在と目的

本稿では、若年層のキャリアデザイン・ライフデザイン（以下「キャリア/ライフデザイン」）の実態を明らかにすることを目的とする。具体的には、高校生の時点で、「30歳のときにどのような働き方（働かないという選択も含めて）をしていたいか」という問への回答と回答者の属性や意識との関連、および、その規定要因について分析することにより、高校生の将来像を明らかにしていく。

学校から職業への移行は、社会に出て行く若者にとり、その後の職業人生を少なからず、左右するという点で非常に重要な意味をもつといえる。一方、採用側の企業は、新規学卒者への求人は一般求人とは別枠で扱い、その結果、新規学卒者向けの別の労働市場が形成されてきた。そして、それは日本型といわれる長期雇用の入り口としての特別な意味づけをもってきた（小杉 2001）。しかし、近年この状況に変化が見られる。回復の兆しが見られるものの、バブル崩壊後の雇用情勢の悪化による新規学卒者の採用減、高等教育進学率の上昇による労働市場への参入年齢の上昇、晩婚化、非婚化、初子出産年齢の上昇による20代後半、30代前半の女性労働力の増加（図1参照）などである。また、正規社員から非正規社員への代替が進み（図2参照）、非正規雇用の形態で入職する新規学卒者も増加している（図3参照）。一方、正規雇用の形態で入職できた者についても、たとえ、大企業へ就職したからと言って、それが必ずしも安定を意味しないようになって来ている。このように、若者をめぐる労働環境は変化しており、「働く」ことをめぐる意識も少なからず影響を受けているのではないだろうか。フリーター、ニート、そして無業者などの増加は、若年層の職業意識や労働観の未成熟・未発達はその背景にあるという議論もある。このような状況で、現代の若者は、自分の将来をどのように描いているのだろうか。正規の雇用形態で入職し、転職をする場合などがあっても、正規という雇用

形態にこだわりながら働きたい若者が多いのだろうか。人々は、あれこれ悩みながら、人生における「働く」ということの意味づけを考え、進路を決定（職業を選択）する。30歳時の自分を想像することができるということは、自分自身の人生にとっての「働く」ことの意味づけがある程度出来ているというように考えることができるのかもしれない。「高校3年生」という同じ状況にありながら、明確な将来像を描いている生徒もいれば、また、一方で、描けない生徒もいる。このような状況は、どのような要因によるのだろうか。卒業を控えた高校3年生の1月時点での調査データを用いて、高校生の描くキャリアライフデザインの実態を明らかにする。

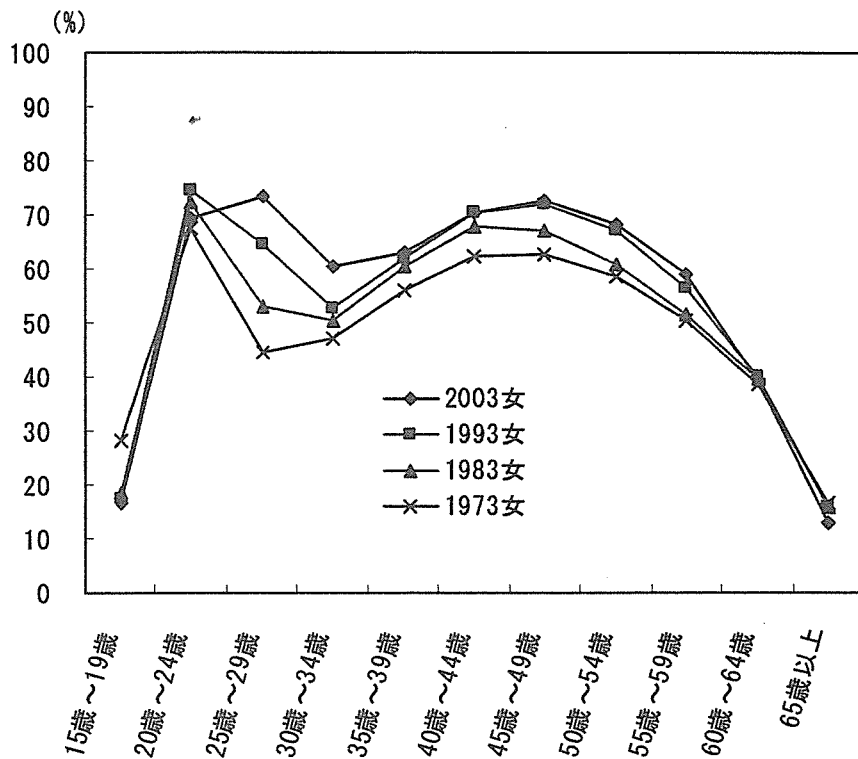


図1. 年齢階級別女性労働力率（『労働力調査』総務省統計局）



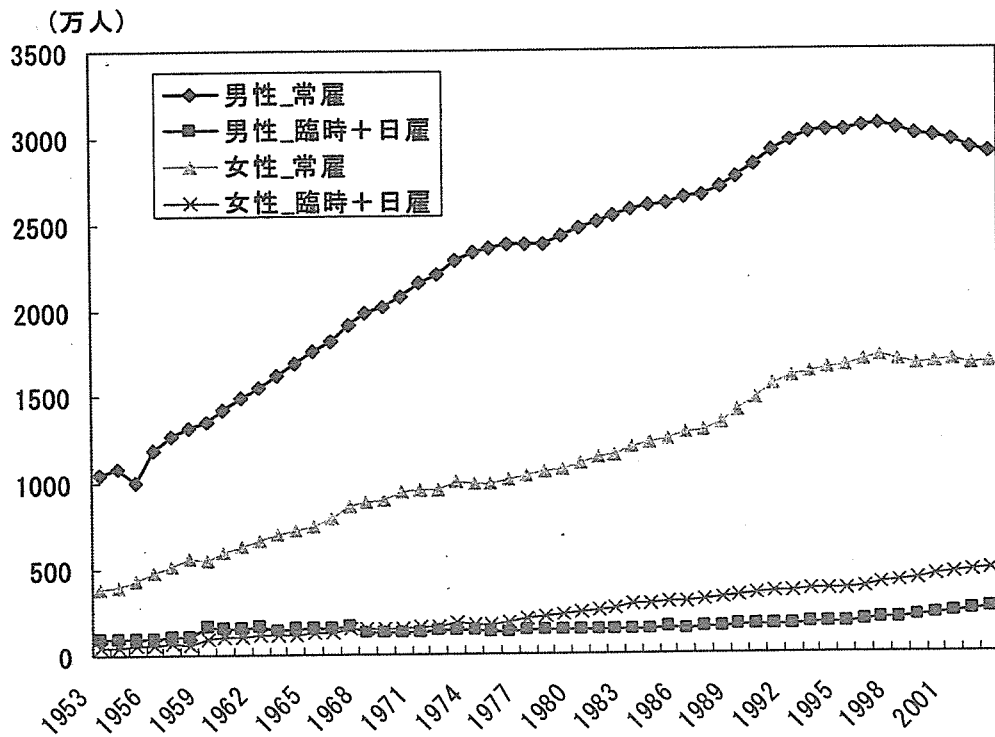
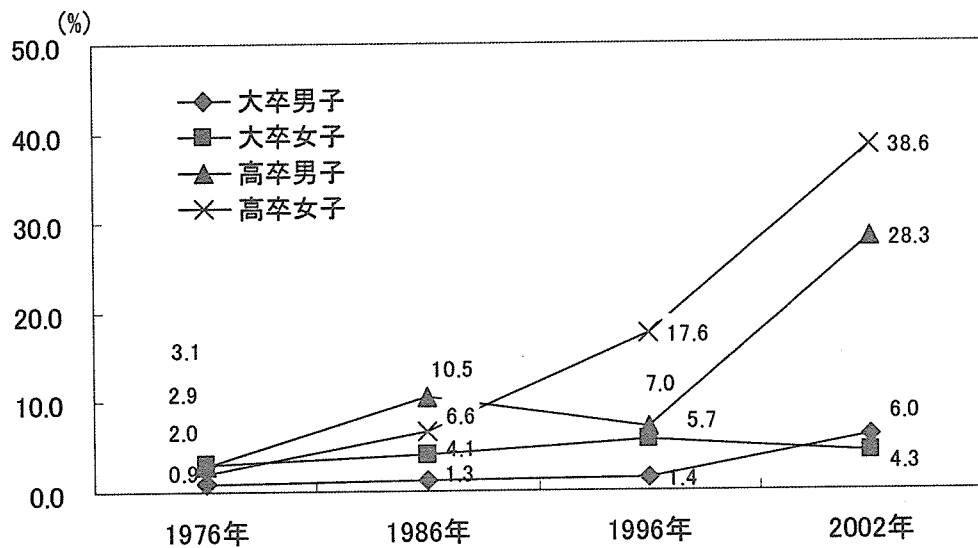


図2. 働き方の変化 (『労働力調査』総務省統計局)



(注) 1976年、1986年については、新規学卒者のうち20~24歳を新規大卒者、19歳以下を新規高卒者とした

図3. 学歴別パートタイム労働者として入職する新規学卒者割合 (『雇用動向調査』厚生労働省)

## 1.2 キャリアデザイン・ライフデザイン

若者の将来像をとらえるという観点から考えると、関連する研究としては、第一に、「女性の進路分化」に関する研究が挙げられるだろう。進路分化に関する研究は、事実としての進路分化を扱うものと、どのような進路分化を希望するかという意識（アスピレーション：地位達成に対する個人の志向や意欲）を扱うものに大別できる（神林 2000）。本研究との関連で言えば、後者がそれに当たり、形成要因として「性役割の内面化（社会化）」に注目した研究が多く、この内面化により、女性の教育アスピレーションや職業アスピレーションは、男性に比べ低く、質的に異なるものとなり、女性内においても、内面化の程度により差異が生じるという（神林 2000）。

第二に、社会階層研究における地位達成に関連する研究として行われてきた「職業アスピレーション」に関する研究を挙げることが出来る。職業アスピレーションは、教育アスピレーションとともに、就学期にある者を対象とし、個人が将来達成したい（就きたい）と考えている職業をたずねることによって測定され、その形成過程（実態と規定要因）および、地位達成過程に対して、社会心理学的な媒介的要因として果たす役割などが検討されてきた（Alexander, Eckland, & Griffin 1975; Burke & Hoelter 1988; 林 2001; 岩永 1990; 片瀬 1990, 2003; 中山・小島 1979; Sewell, Haller, & Portes 1969; Sewell, Haller, & Ohlendorf 1970; 新谷 1996）。女子よりも男子で未定の者が多い傾向が見られること、具体的な職業アスピレーションとしては、専門職を志向する者が多いことが指摘されている（片瀬 1990; 木村・元治 2001; 尾嶋 2001; 新谷 1996）。また、出身家庭における経済的・文化的状況なども影響を与えるとされている。一方、教育社会学の分野でも、教育選抜の過程で職業アスピレーションが分化・形成される過程をめぐって研究が行われてきた（岩木・耳塚 1983; 荻谷 1986; 耳塚 1988）。中学・高校段階での学業成績が大学進学希望を強く規定し、大学教育を前提とする職業アスピレーションとその達成可能性の認知が形成され、学業成績に相応な職業アスピレーションを描く傾向が見られることが指摘されている（荻谷 1995; 竹内 1995）。また、学校ランク、学業成績、教師からの奨励、友人などの影響などもアスピレーションを規定する要因として挙げられている。

また、多くはないが、第三に、成人を対象とした「キャリアアスピレーション」に関する研究が挙げられる（林 2001, 2002; 佐藤 2007）。これは、職業生活への参入後に観察される、長期的な見通しや経路を含む職業達成目標として位置づけられている（林 2002）。林（2002）は、キャリア形成期にある男性を対象に、企業内昇進アスピレーションや独立開業アスピレーションをその指標として用いて、その形成要因などを検討している。

本稿では、就学期にある若者を対象とし、「働く」ということをめぐる将来像を明らかにするため、これらの知見を踏まえながらも、回答者の属性や「働く」ことに関連する意識とどのような関連があるのかを中心に検討していく。また、働かないという選択肢も含めて検討するため、本稿では、キャリアデザイン・ライフデザインという用語を用いる。

## 2. データと変数

### 2.1 データ

本稿の分析では、高校3年生を対象とし、2004年1月に実施した『高校生の生活と進路に関するアンケート』のデータを用いる。

## 2.2 変数

本稿では、高校生の考える 30 歳時点での希望するキャリア/ライフデザインについて検討していく。キャリア/ライフデザインの指標には、「30 歳のときにどのような働き方をしたいか。」という問への回答を用いる。

表 1 30 歳時のキャリア/ライフデザイン

		度数	%	有効%
男子 有効	正社員として働きたい	2372	64.4	66.7
	自分で事業を起こしたい	431	11.7	12.1
	親の家業をつぎたい	53	1.4	1.5
	独立して一人で仕事をしたい	377	10.2	10.6
	アルバイトやパートで働きたい	9	0.2	0.3
	専業主婦・主夫になりたい	14	0.4	0.4
	その他	66	1.8	1.9
	わからない	233	6.3	6.5
	正社員でもアルバイト・パートどちらでもよいので働きたい	3	0.1	0.1
	合計	3558	96.6	100.0
欠損値 無回答	125	3.4		
合計	3683	100.0		
女子 有効	正社員として働きたい	2085	54.0	55.0
	自分で事業を起こしたい	229	5.9	6.0
	親の家業をつぎたい	20	0.5	0.5
	独立して一人で仕事をしたい	388	10.0	10.2
	アルバイトやパートで働きたい	188	4.9	5.0
	専業主婦・主夫になりたい	532	13.8	14.0
	その他	68	1.8	1.8
	わからない	280	7.3	7.4
	合計	3790	98.2	100.0
	欠損値 無回答	71	1.8	
合計	3861	100.0		

表 1 は、男女別に 30 歳時点での希望するキャリア/ライフデザインを示したものである。男女ともに「正社員」がもっとも多いが（男子 66.7%、女子 55.0%）、「アルバイト・パート」や「専業主婦・主夫」の違いは、たぶん現在の男女の状況を反映した結果となっており、その分布に男女で違いが見られる。また、男子では、「起業」（12.1%）、「独立」（10.6%）と続いて多く、一方、女子では、「専業主婦」（14.0%）、「独立」（10.2%）の順となっている。「独立」と「起業」は、企業に雇われるという枠組みの外にあるという点では、同じ意味をもつが、「独立」は、男女とも約 1 割と同程度であるのに対し、「起業」についてみると、女子は、6.0%と男子の半分程度であり、女子にとって「起業」することは、ハードルが高いことと認識されているのかもしれない。「わからない（未定）」は、女子の方が若干多い傾向が見られる（男子 6.5%、女子

7.4%)。職業アスピレーションの研究では、男子の方が未定者が多い傾向が見られる点とは異なる結果である。これは、職業アスピレーションの場合、学校卒業直後の職業希望をたずねる場合が多く、本稿のデータは、30歳時点という10年超先の時点での希望をたずねているということが影響を及ぼした可能性がある。

以下の分析では、表1に示された30歳時点での希望するキャリア/ライフデザインにより、対象者を、男子の場合は、〔正社員〕〔自営〕〔アルバイト・パート他〕〔未定〕の4カテゴリー、女子の場合は、以上の4カテゴリーに〔専業主婦〕を加えた5カテゴリーに、分類し<sup>1)</sup>、カテゴリーごとの属性や意識の違いを見ていくことにする。分類後の男女別の分布は表2に示した通りである。

表2 30歳時のキャリア/ライフデザイン (カテゴリーごと)

		30歳時のキャリア/ライフデザイン (%)						
		正社員	自営	専業主婦	アルバイト・パート他	未定	合計 (N)	
男子		66.7	24.2	-----	2.6	6.5	100.0	(3558)
女子		55.0	16.8	14.0	6.8	7.4	100.0	(3790)
合計		60.7	20.4	7.2	4.7	7.0	100.0	(7348)

$\chi^2=658.901$   $df=4$   $p<0.001$  (専業主夫を別カテゴリーにした場合  $\chi^2=635.889$   $df=4$   $p<0.001$ )

注) 男子生徒の「専業主夫になりたい」は人数が少ない(14人)ため「アルバイト・パート・その他」に分類 (以下の分析も同様)

### 3. 分析

#### 3.1 高校生の30歳時のキャリアデザイン・ライフデザインと属性

はじめに、回答者の属性として、学校ランク、成績自己評価、調査時点での予定進路との関係を見ていく。

##### 3.1.1 高校生の30歳時のキャリアデザイン・ライフデザインと学校ランク

まず、キャリア/ライフデザインと学校ランクの関係を見てみよう (表3)。男子では、キャリア/ライフデザインによる学校ランクの分布に違いは見られないが、女子では、〔正社員〕と〔自営〕で普通科上位校比率が高く、〔専業主婦〕、〔アルバイト・パート他〕、〔未定〕で、普通科下位校、総合学科比率が高いという二極化傾向が見られる。表には示していないが、学校ランク別に見ても、普通科上位校では、〔正社員〕と〔自営〕の比率が高く、普通科下位校、総合学科で〔専業主婦〕と〔アルバイト・パート他〕が高いという違いが見られる。女子の場合には、学校ランクにより「働く」ことの意味づけが違う可能性が示唆される。